

193. 栗東町下鈎遺跡

蓮台寺隣接地の調査について

1. はじめに

栗東町蓮台寺は延暦8年(789)に最澄によって創建されたと伝えられる天台宗の寺院である。『興福寺官務牒疏』では、湖南の地に勢力を誇った金勝寺の二十五箇別院のひとつに数えられている^①

蓮台寺に伝えられた仏像についてみると、現在比叡山の横川秘宝館に安置されている薬師如来像は、10世紀末から11世紀初頭の天台薬師像であるといわれ、両脇侍像は14世紀半ばころの作風であるという。また、美術院蔵となっている二王像は11世紀の作風とされる^②

天和2年(1682)に鑄造された梵鐘の銘によれば、往時には七堂伽藍を具備していた蓮台寺も応仁元年(1467)には兵火に、寛永年間(1624~1644)には火災にみまわれたという^③さらに、1934年におそってきた室戸台風は、中世から残されていた蓮台寺の仁王門を倒壊させた。多くの災害を受けたすえ、蓮台寺に残

されたのは、本堂の仮堂、鐘楼のみであった。

栗東町大字下鈎に、小字「蓮台寺」という地名がある。小堂が残されたのは「蓮台寺」の東側、小字「森ノ内」であり、さらに、「森ノ内」の北西には「森ノ西」、「森ノ内」の南には「仁王前」といった寺院関係と考えられる小字名がある。また、小字「森の内」の約方一町の範囲は、栗東郡条里(N-33°-E)とは異なった、真南北方向に近い地割りが遺こっている。

『栗東郡誌』では、『延宝検地帳』に書かれた寺地「九反一畝十二歩、東西五十間、南北五十五間」が、慶長検地帳の頃から変わらないことから、蓮台寺のかつての寺域が、方三町に及んだものと推定している^④

1990年、小字「森ノ内」の北西隅、現在の蓮台寺域の北隣において、宅地造成にともない発掘調査を実施した。調査範囲は1,700平米で、調査前は、畑地(T-1)、蓮台寺の墓地跡(T-2)、竹藪(T-3)であった。墓地は蓮台寺のもので、五輪塔などの墓石はすでに同寺によって移されている。

また同年、隣接する蓮台寺寺域においても小規模な調査が実施されており、近世以降の整地された土層や9世紀の井戸などが見つかっている^⑤



図-1 調査位置図

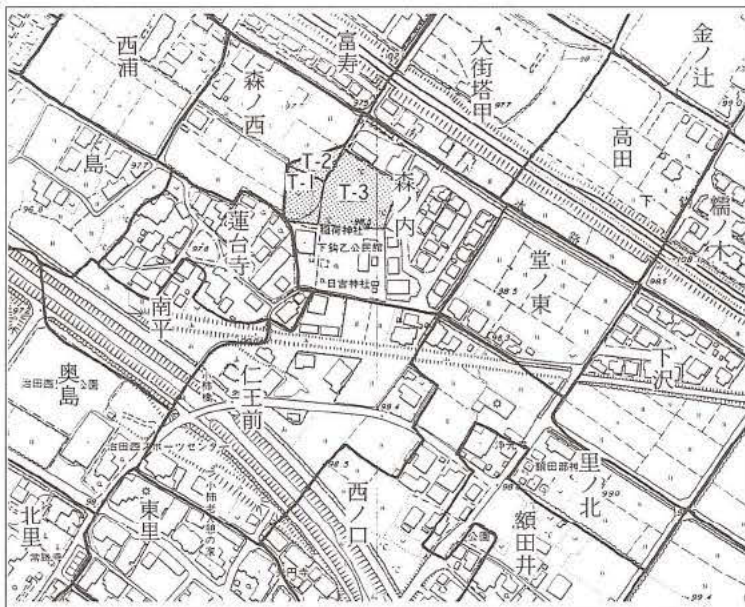


図-2 調査地周辺の小字名(S=1/5000)

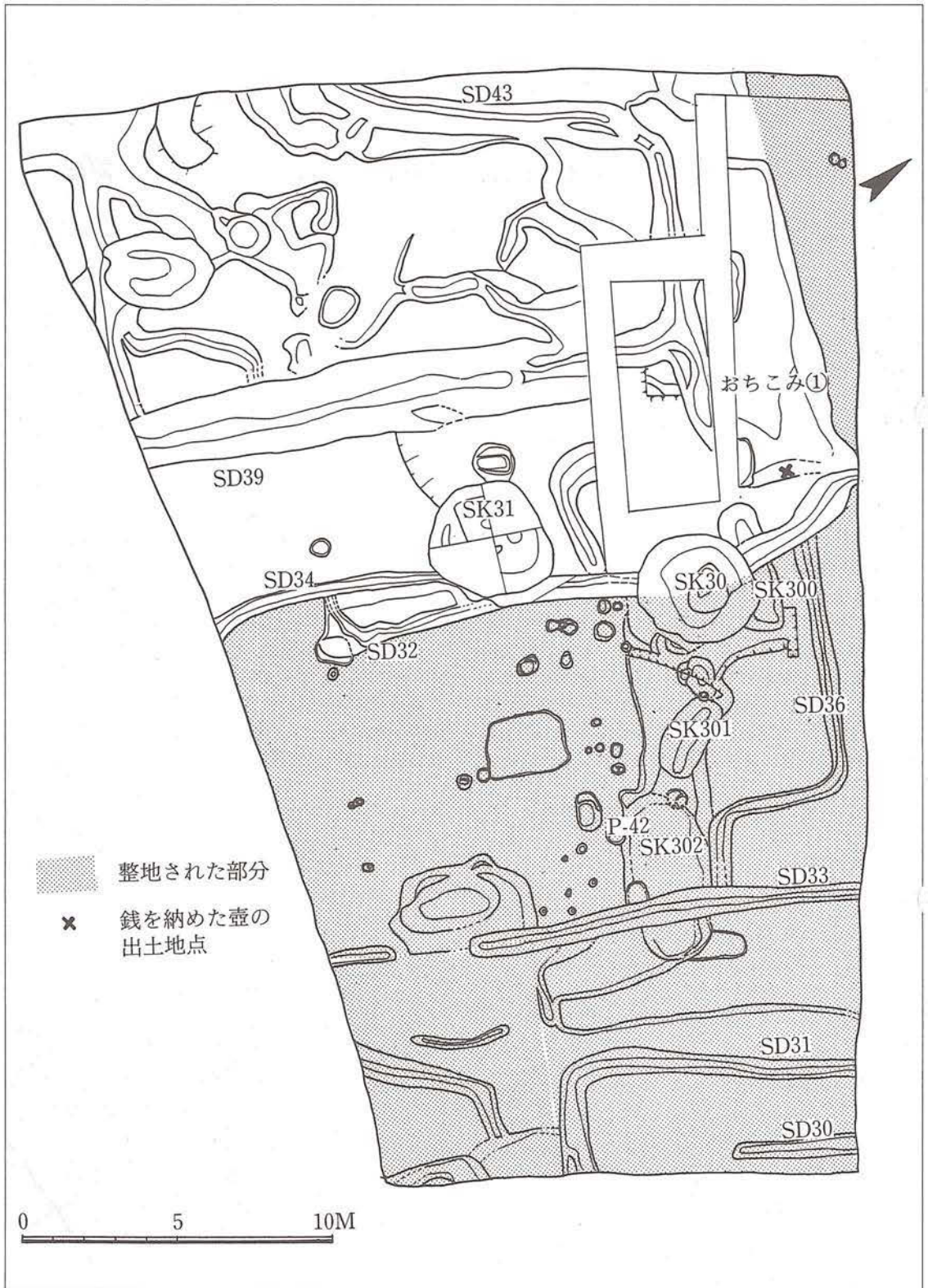


図-3 遺構図

2. T-1、2の調査

T-1 5世紀後半の土坑墓、古墳時代と考えられる周溝状遺構、9世紀、13世紀、近代の井戸が検出された。

T-2 蓮台寺の墓地を区画していたと考えられる溝が検出された。五輪塔の風・空輪が出土している。

3. T-3の調査

地形および層序

T-3は東側半分が周囲に比べて約1m小高くなっており、この高さは蓮台寺境内地に共通する。まず、この小高い部分の層序をのべると、地表面下約50cmは大部分が竹の根によって攪乱を受けているレキ層である。その下に黄色粘質微砂質土が約30cm堆積している。さらに褐色系の砂質土があり、これがT-3で中心となる時期である中世の遺構検出面となっている。またこの層には縄文時代から古墳時代の遺物がふくまれている。他の場所から持ちこまれて整地された土であろう。T-3の中では、最もよくしまった層である。整地層以下は砂層からなる地山である。レキ層は、トレンチ中央部より西側に向かって落ち込んでおり、整地層がみられるのはSD-32の東側のみである。整地層の方向は概ねN-28°-Eで、蓮台寺境内地の異方位地割りよりもやや東にふるものであるが、中世の遺構群の方向を規制している。T-3北コーナー部分では、黄灰色粘質細砂質土からなる整地された部分がみられ、T-3における整地部分は、北側で屈曲していることがわかる。

遺構

中央の整地された部分には溝、土坑、ピットが、南西側および北東側に落ちこむ部分からは大溝などが検出されている。

SK-30、31 径約4mの円形の土坑である。もっとも新しい遺構である。

SD-30~34 幅が約80cm、深さ約50cmで、黄色土を埋土とし、断面が逆台形の溝である。SD-34は、SK-30、31に切られるが、そのほかの遺構には先行するものである。また、SD-33およびSD-34は、整地された部分の西限および東限にそれぞれ一致する。SD-30~34からは縄文時代から中世に至る遺物が出土している。

SD-36 整地層上に掘削された溝である。SD-33、34に先行する。埋土は茶味黄色土で深さ約55cmである。**整地層上のピット** 整地層のうち、SD-33、土坑群、SD-34によって区画された部分でいくつかのピットが見つかるが、建物としての明確なまとまりはとらえることができなかった。このうちP-42は一辺約60cmの隅丸方形ピットで、15世紀前半の遺物が出土している。また、ピット群の間の整地層上に焼土が認

められた部分があった。

SK-300 長径4.6m、短径1.5mの長楕円形土坑である。13世紀後半の遺物が多量に出土している。SK-30、SD-34に切られている。

SK-301 長径2.8m、短径1.5mの長楕円形土坑である。15世紀の遺物が出土している。

SK-302 長径5.5m、短径2.8mの長楕円形土坑である。14~15世紀の遺物が出土している。P-42に切られる。

整地された部分が西側に落ち込んでいく付近からは、大溝が検出されている。

SD-39 整地された部分の約5m西で検出された、幅約2.5m、深さ約1.1mのV字の大溝である。この溝はN-28°-E方向に掘削されており、これは中央の整地された部分に並行している。上層からは14世紀の遺物が、下層からは13世紀後半の遺物が出土している。大溝は上層の時期に掘り直されたものと考えられる。また、最上層に黄色土が被っている部分があり、ここからは、近世の遺物が出土している。また、大溝はその北端で西に折れ、さらにトレンチ西隅で南に折れている(SD-43)。

落ち込み(1) 大溝北端の屈曲部の北側にある、幅広い



T-3 遺構全景



S K 300

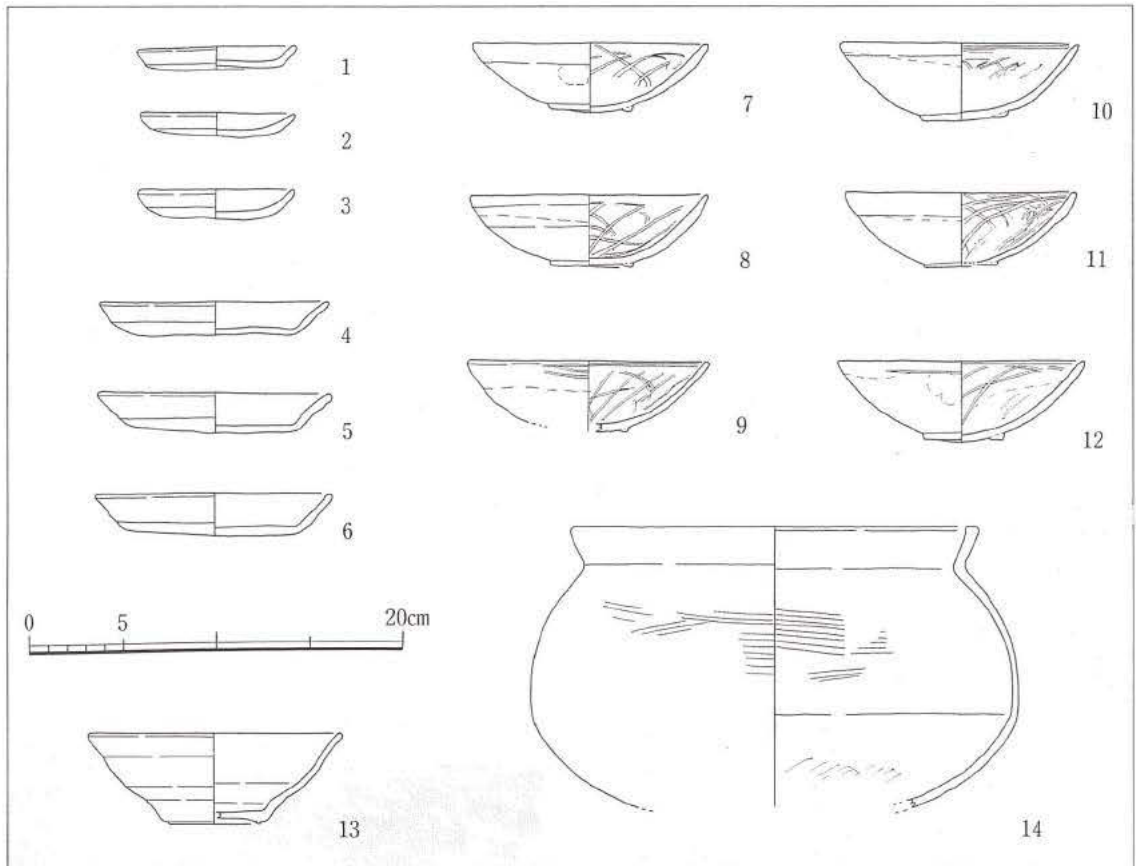


図-4 SK 300出土遺物

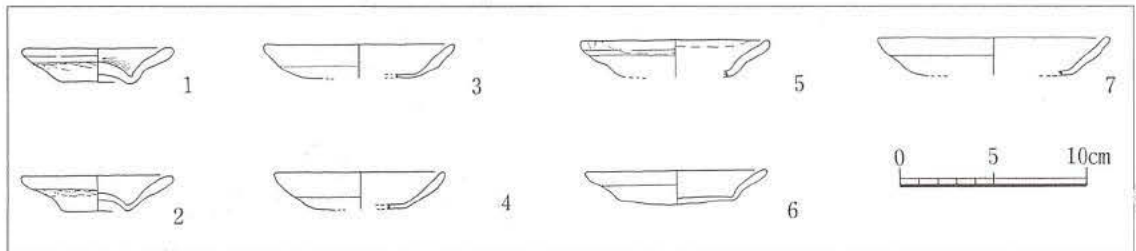


図-5 SK 301出土遺物

落ち込みであり、縄文時代から中世にいたる多くの遺物を包含していた。この落ちこみの東端からは完形の篠系須恵器長頸壺が出土し、壺内には渡来銭（咸淳元宝）^④が2枚入れてあった。

遺物

T-3全体より、土器、石器、及び鉄器が多く出土している。遺構に伴う中世の遺物のほか、盛土中からは、縄文時代から平安時代にいたる、土器および石器が見つかったが、これらの遺物は、盛土中の出土というものの、特筆に値するものが多くあり、改めて報告することとする。以下では遺構に伴う遺物及び、包含層出土の中世の遺物を概観する。

SK-300 1～3は土師器小皿である。1はあげぞこぎみの平らな底部から体部を短く屈曲させて口縁部に一段の横ナデを加え、端部を丸く収める。2、3は、平らな底部から体部を内弯気味に立ち上げ口縁部に一段の横ナデを加え、端部に面をもつ。口径は、8.3cm～8.6cm、器高は1.2cm～1.5cmである。4～6は土師器大皿である。4、5は平らな底部から、体部を外反気味に立ち上げ口縁部に一段の横ナデを加えるもので、5は端部に面をもつ。6は、平らな底部から、口縁部を斜め上方に直線的に立ち上げ、端部を丸くおさめ、内面に段をもつ。大皿の口径は12.2cm～12.5cm、器高は1.8cm～2.2cmである。7～12は黒色土器の碗である。

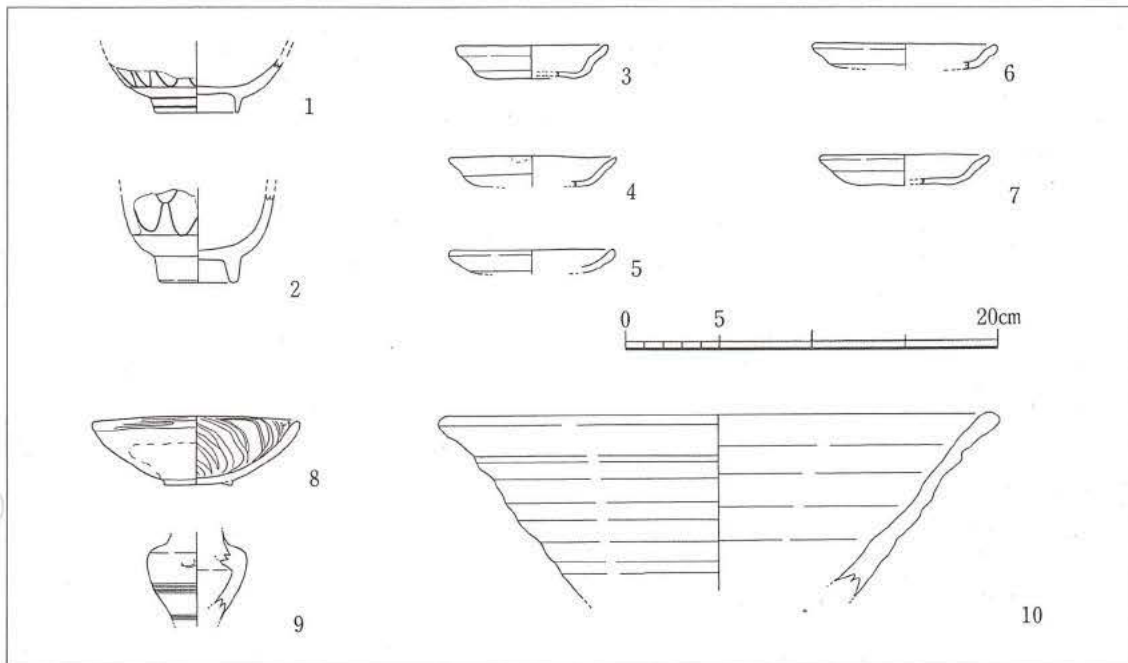


図-6 SD 39 最上層・上層出土遺物

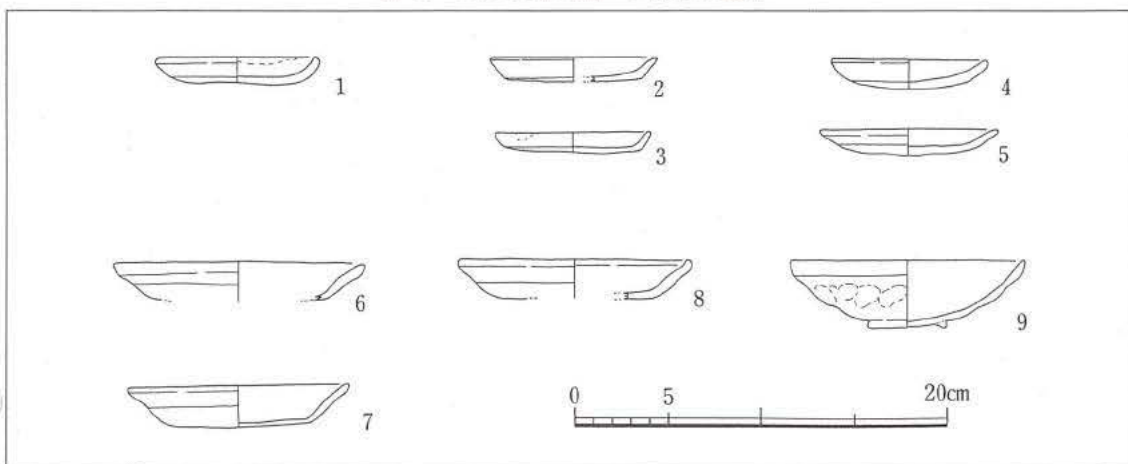


図-7 SD 39 下層出土遺物

7～9、11、12は丸い底部から体部が内弯気味に立ち上がるもので、10は底部から体部が直線的に立ち上がる。いずれも、底部には断面三角形の稚拙な高台が張りつけられ、内面にはラセン状暗文をほどこす。内面及び口縁部外面には炭素を吸着している。9、10は口縁部内面に沈線が巡る。口径は12～13cm、器高は、3.8～4.3cmである。森氏編年のⅢ-2期に並行するものと考えられる^⑦4は、灰釉系陶器碗である。薄手の精製品で、口縁部内面は、面取りされ、底部には退化した高台がはりつけられる。口径13.8cm、器高5cmである。藤沢氏編年第Ⅲ段階第7形式並行と考えられる^⑧土坑より出土した、灰釉系の碗はこの一点のみである。

15は土師質の鍋である。口縁部がくの字に屈曲するもので、体部下半及び口縁部外面に煤が付着する。

SK-301 11～7は土師器皿である。1、2は、上げ底の底部から体部が外反して立ち上がり、強い指押さえて調整、口縁を横ナデする、「ヘソ皿」タイプである。口径は、8.2cm、器高は1.8cm～2.0cmである。3、4、7は体部が直線的に外上方にのびる。5、6は、平らな底部から体部が外反して立ち上がる。3～7は、口縁部を横ナデにより調整するもの。3～6の口径は9.2～10.1cm、器高は1.8～2.0cmで、7は口径12.3cm、器高2.0cmである。

SD-39最上層 1、2は伊万里系染付碗である。

SD-39上層 3～7は土師器皿である。3、4は平らな底部から外反する体部を立ち上げ、口縁部に一段の横ナデを加える。口径は8.2cm、器高は1.8cmのものと、口径9.1cm、器高1.6cmのものがある。5は、体部がやや内弯して立ち上がり、口縁部内面を面取りするものである。6、7は、口縁部が、外反して肥厚し一段の横ナデで調整する。8は黒色土器碗である。丸い底部から、体部が内弯気味に立ち上がり、内面にラセン状暗文を施す。内面及び口縁部外面に炭素を吸着させる。8は、灰釉陶器茶入れである。外面に施釉され、体部に3条の沈線が2段巡る。10は常滑系こね鉢である。体部は、輪積みの後横ナデで調整し、さらに体部外面下半はケズリを加える。体部内面下半および底部内面は使用により摩滅している。13世紀後半から14世紀中葉頃のものである⁹⁾

SD-39下層 1～5は、土師器小皿である。1は、平らな底部からやや内弯した口縁部が斜め上方に立ち上がり、口縁部に一段の横ナデを施したものである。2、3は、平らな底部から口縁部が直線的に立ち上り、口縁部に一段の横ナデを施すものである。4は、丸みのある底部から、口縁部が内弯気味に立ち上がり、口縁部に一段の横ナデを施す。5は丸みのある底部から立ち上がった口縁端部がやや外反するものである。口径8.4～9.5cm、器高は1.1～1.6cmである。6～8は、土師器の大皿である。平らな底部から体部が外反して立ち上がり、口縁部に一段の横ナデを施す。6、7は、口縁端部を丸くおさめ、8は、内面に稜をもってやや内傾させる。6～8の口径は、11.4～13.8cm、器高は2.2cmである。9は黒色土器と同じ成形手法を持つ土師器碗である。時期的には、SK-300とほぼ同時期である。

4. 小結

本調査で明らかになった遺構の並行関係は、以下の如くである。

時期	土坑	大溝	Pit
13後	SK-300	SD-39下層	
14	SK-302	SD-39上層	
15	SK-301		P-42

今回の調査で検出されたのは整地層、および整地層上に掘り込まれた13～15世紀のピット、土坑、整地層を区画する濠である。掘立柱建物は確認されなかったものの、整地層上で礎石らしい石も見つかっており、何らかの建物が存在した可能性が考えられる。また、今回の調査地からは、報告した遺物のほかにも石鍋、墨書土器、青磁水滴、青白磁合子、といった多彩な遺物が出土し、盛り土をして大規模な整地を行っていることや、断面V字形に掘削した大溝が存在することな

ど、一般的な集落とは異なる様相を示す。

文献に記載のある蓮台寺は、平安時代から兵火に見舞われる室町時代までは空白の期間であり、14世紀半ばごろの作風とされる薬師如来両脇侍像が現代に伝えられてはいるものの、蓮台寺が成立当初から同一の場所に存在したかどうかという点を含め、不明な点が多いものであった。今回の遺構の性格が寺院であったかどうかは決め手にかけるが、近世蓮台寺の寺域のなかに13～15世紀には整地を伴う建物が存在した可能性があることがわかった。このことは、当該期に蓮台寺が継続して存在したか、もしくは寺院の維持または整備に関連した有力者が居住していたという可能性を示すものと考えられる。

また、蓮台寺の創建年代とされる平安時代の遺構遺物としては、9世紀の井戸がT-1および隣接する寺域から1基ずつみつまっていることと、T-3から出土した銭を納めた壺が平安時代のものであったことなどがある。これにより寺院の創建を平安時代とすることはできないが、今後蓮台寺の歴史を解明する上で重要となろう。

(雨森智美)

注

- ① 堀 大慈 「寺院の興隆」『栗東の歴史』 1988
- ② 佐々木進 「仏教美術の開花」『栗東の歴史』 1988
- ③ 栗太郡役所 『栗太郡誌』 1972
- ⑤ 榎栗東町文化体育振興事業団 『1989年度年報』 1990
- ⑥ 13世紀後半につくられた宋銭である。
- ⑦ 森 隆 「滋賀県における古代・中世土器」『中近世土器の基礎研究』 I 1985
- ⑧ 藤沢良祐 「瀬戸古窯址群 I」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要 I』 1982
- ⑨ 赤羽一郎 「常滑一知多半島窯址群」『世界陶磁全集 3 日本中世』 1977

今回の報告に当り、稲垣正宏、清水好洋、近藤広、橋本奈保子、西前 悠、井原ちえみ、の各氏にご教示、ご協力をえた。記して謝意を表したい。